

【論文】

『リア王の悲劇』の新構想 (1)  
—フランス王国軍は来ているか—

磯山 甚一\*

A New Design in *The Tragedy of King Lear* (1):  
Is the army of France landed?

ISOYAMA, Jinichi

要約：リア王説話を題材にしたシェイクスピアの戯曲には1608年出版の『リア王の歴史劇』と、1623年の全集に収められた『リア王の悲劇』と、異なる二つのテキストが伝わる。これらのうち後者は前者をもとに作者自身による注意深い「改訂」を経て完成されたとする説が有力であり、本論はその改訂説に沿って二つの戯曲を比較検討し、いかなる新構想があったかを探る試みの第一段階である。材源となったリア王説話やシェイクスピアの『リア王の歴史劇』では、フランス王国軍のブリテン島上陸と侵攻が明確であるのに対して、改訂後の『リア王の悲劇』においても同様にフランス軍は侵攻しているか？この観点からリア王の末娘でフランス王妃コーディリアを焦点に改訂結果としての『リア王の悲劇』を検討すると、フランス王国軍に関する言及がほぼ一貫して削除されており、登場する軍隊がフランス王国軍かどうか、曖昧にされている。そこには、「歴史劇」から「悲劇」への改訂にあたっての新しい構想があったことが見て取れるはずである。

キーワード：リア王説話 『リア王の歴史劇』 『リア王の悲劇』 改訂説  
フランス王国軍

---

\*いそやま じんいち 文教大学名誉教授

## 1. 父と娘三人の物語

シェイクスピア作のリア王の物語の中心にあるのは、父親とその次の世代の三人の娘たちの関係である。その物語をまず簡単に、親子間、そして姉妹間の関係に焦点を当てて確認してみよう。父親は自分で開幕冒頭「高齡」の意味で‘our age’と言い、末娘と再会して‘old man’やまたは‘fourscore and upward’（「80歳を越した」）と曖昧に言うが、正確な数字はともかく、高齡であると自分で自覚している。リアの妻つまり娘たちの実の母親は登場せず、言及もなく、生きていのかどうかも分からない。その他に兄弟姉妹はなく、それらの三人の娘たちの年齢にも手がかりはない<sup>1)</sup>。

開幕冒頭で父親のリアは自分の王国を娘たちのために三つに分割した、と宣言する。その王国とはリアが統治する王国であり、分割したとする意味には、王国の支配権、それに付随する貴族その他の家臣、領民に対する権限まで、あらゆる権力をも含むものと理解される。それらを三分割して娘たちに相続財産としていわば生前贈与する、というわけである。その行為について、父親と娘たち当事者の間でも、彼らの所属する王家の伝統でも、または王国でも、何かルールや法はないらしく、父親は個人として自分の考えで決定できると考えているようであり、周囲からもその行為自体に対して何ら異議申し立てはない。だが結果としては、上の二人の娘たちが父親の財産（＝上述の王国）の全体を二人で受け取り、末の娘は何も贈与されない。その上、末娘は父親から親子の縁を切ると言い渡され、追われるように父の元を去る。

父親は二人の娘に王国を譲ったあと、それら二人の娘達の居所に月単位で交互に居を構えたいと自分の意向を伝える。しかしこの計画はうまく行かず、二週間 (fortnight) もたたずに破綻、まもなく父と娘二人の関係は悪化し、父は娘たちのもとを去り、正気を失い荒野を彷徨する。その間、末娘は父親と姉二人の様子を人を介して知らされていたので、報告を受けて駆けつけて父親と合流する。その結果、父と末娘、姉二人、これら肉親が二つの勢力に分かれて真っ向から対立する。結果は、軍事力を伴う血なま

ぐさい抗争の中で父と末娘が命を落とし、姉二人も生き延びることはなかった。

このように父親を巻き込んで三人の娘たちの争いが起きるが、平和的な解決が模索もされないまま物語が進行し、暴力を伴う争い（兵士達までも登場する武力衝突）にまで発展する。シェイクスピアが材源としたリア王の物語では、武力衝突まで行き着く経緯は明らかであり、疑問の余地はない。リアは姉たちと争った後に末娘のいる王国に行き、末娘の夫であるその王に自分の王位復権を援護して欲しいと頼み込み、その王が率いる軍勢とともにかつての自分の国に軍事侵攻し、かくして王国と王国が相争う戦争に発展するからである。

ところがシェイクスピアのリア王の物語では、父親は自分の国に止まったままであり、精神錯乱に陥ってしまうので、自分の王位復権をねらうどころか、先頭に立って戦争を起こすことなど不可能な状況にある。その父を助けようとして、軍勢とともに末娘が合流するのだ。その末娘の軍勢は、ではフランス王国軍なのか、それとも別の軍勢なのか。それがフランス王国軍であれば、軍事的侵略である。これを迎える軍は、自国への侵略に抗する自衛のための戦争を遂行する。最後に末娘が命を落とす事實は、帰趨は人知を超えて計り知れない侵略戦争を仕掛けた側の敗亡ということになるだろう<sup>2)</sup>。しかしこれから考察するとおり、その軍勢がもしもフランス王国軍でないとしたら、何を意味するのか。

ここで重要な事実がある。シェイクスピア作とされるリア王の物語には、『リア王の歴史劇 (*The History of King Lear*)』と、『リア王の悲劇 (*The Tragedy of King Lear*)』として、異なるタイトルを持つ二つのテキストが伝わっている。年代的には最初に「歴史劇 (history)」として出来上がった戯曲が、作者によると考えられる注意深い「改訂」の作業を経て、後者の「悲劇 (tragedy)」に仕上げられたとみなされている。これらの戯曲のうち、最初の『リア王の歴史劇』においては、末娘とフランス王国軍が軍事侵攻しており、材源となったリア王物語と同じ成り行きである。ところ

が、「改訂版」とされる『リア王の悲劇』においては、フランス王国軍が上陸し侵攻しているかどうか、曖昧にされていると思われる。この事実に着目することで、いわば、作者の改訂作業の現場を目撃できるのではないか。その改訂作業を通じて、フランス王国軍の来っていないと想定されるリア王物語がどのように作られたか、考察できるからである<sup>3)</sup>。

## 2. リア王説話

まずリア王という人物像について、基本的なことを確認しておきたい。リア王はケルト伝説の中の人物であり、「リア王説話」と呼ばれる物語類型はヨーロッパに限らずオリエントの多くの地域でも民間伝承として伝わっているという<sup>4)</sup>。イングランドにおいては、ジェフリー・オヴ・モンマスの『ブリテン王列伝』に収められたものが最も早い年代にあたり、リア王伝説のイングランドにおける起源である。ラテン語で書かれたこの書は1138～9年頃までには成立していたとされる<sup>5)</sup>。シェイクスピアがロンドンで演劇活動をしていたときに英語訳は出ていなかったが、シェイクスピアがそれを参照して材源となった可能性が高いとされる<sup>6)</sup>。

シェイクスピアのリア王の物語はそのような遠い過去から積み重ねられた多くの物語に連なるものであり、血縁関係にある父と娘たちが登場する物語を素材として、人間関係をめぐる根源的なものが表現されているのではないかと思わせる。これらのうち、イングランドにおけるリア王伝説ではいずれも、当初は父親と三姉妹の間の争いだったものが、国と国の武力衝突、すなわち戦争へと発展する。シェイクスピアの場合も、確かに最初の『リア王の歴史劇』ではそのような物語の流れを踏襲している。しかしそれを「改訂」したとされる『リア王の悲劇』では、物語進行は基本的に同じであるが、フランス王国軍が侵攻しているかどうか、確実になくなっている。結果として、その軍が来ているかどうかによりこれら二つの戯曲の内実は大きく異なると思われるのである。

シェイクスピアに至る前のリア王の物語の概要を、ジェフリー・オヴ・

モンマスの『ブリテン王列伝』(Everyman's Library版)で確認しておこう。物語はこうだ。リア王は自分の老いを自覚し、三人の娘をそれぞれふさわしい夫と結婚させ王国を分割して贈ろうと考えた。しかし、リアの最初の意図とは異なる成り行きになったため、リアは貴族たちと相談した結果、島全体(ブリテン島)の半分を二人の姉娘たちとその夫たちに贈り、自分の死後はブリテン王国全体をそれら二人の娘とその結婚相手の公爵たちに帰属させると取り決める。末の娘は持参金も領地も与えられず、フランク人の王と結婚する。この王はガリア(今日のフランス)の三分の一の領土を統治していたので、持参金も領地も必要なく、自分の後継者を生んでくれるだろうその末娘との結婚だけが望みであった。かくてリアは王国分割後も自分の領地を維持して統治していたが、やがて娘の夫(公爵)たちがリアに反乱を起こし、義理の父であるリアからその王国も力で奪い取る(娘婿たちによる反乱の物語の部分はシェイクスピアの戯曲にはない)。それでもリアは、自分の従者たちを引き連れて娘たちと共に過ごした。しかしそのように過ごす間に従者の数を二人の娘に次々と減らされ続けて我慢の限界となり、末娘のいるガリアの地へ一人の騎士だけを従えてたどり着く。末娘の取り計らいで王にふさわしい待遇で迎えられると、リアはフランク人の王に自分の王国回復のために援護して欲しいと訴える。フランク人の王は義父に全面的な支援を約束、ガリア全域から軍隊を招集し、義父の復位を目指して挙兵、ブリテン王国に侵攻し、制圧する。結果、リアはブリテン国王に復位し、復位後3年の間再び王国を治めて死ぬ。フランク人の王も死んだので、末の娘が父親の王国を引き継ぎ、女王として5年の間統治するが、女王は甥にあたる公爵たち(姉の子どもたち)の反乱に遭って拘束されたあと、牢獄で自ら首をつって自殺する。いかにもヨーロッパ中世世界にありそうな、骨肉相食むぞっとする物語である<sup>7)</sup>。

次に、シェイクスピアにとって直接の材源になったとされる作者不詳の戯曲*The True Chronicle Historie of King Leir and his Three Daughters: Goneril, Ragan, and Cordella*があった(1605年刊)。この戯曲の作者が用いた物語の

材源に関しては、エドモンド・スペンサーの『妖精の女王』（1590年から1609年にかけて刊行）の中で語られるリア王の物語（第2巻第10篇）などであり、上述のモンマス『ブリテン王列伝』を参照した形跡はないとされる<sup>8)</sup>。ただし物語の骨格はモンマスと変わらない。リア王の退位と王国分割、姉二人がブリテン国内の王たち（Kings、公爵ではなく、「王」の称号が用いられる）と結婚、それら二人の姉夫婦による王国の継承、末娘がフランス王（the Gallian King）と結婚、自分に対する二人の姉娘たちの処遇が不満の原因となり、リアは末娘に助けを求めてフランスへ渡航、そして二人の和解、フランス王が軍を率いてブリテンに攻め入り、めでたくリアをブリテン王に復位させる、というもので、こちらは悲喜劇的展開の歴史劇である。（これらの材源のうち、Monmouth, Holinshed, *King Lear*, *The History of King Lear*, *The Tragedy of King Lear*について登場人物やその他の特徴を比較対照した一覧が表1である。）

### 3. Q1からF1へ —— フランス王国軍は来ているか

上述した材源をもとにして作られたのが、シェイクスピアのリア王物語であり、テキストは二種類伝わっている。1608年に「第1四つ折本（The First Quarto、略称Q1）」として出版された『リア王の歴史劇』のテキストと、1623年出版の「第1二つ折本（The First Folio、略称F1）」に収められた『リア王の悲劇』のテキストである。Q1はシェイクスピア生前に出版され、F1は作者死後に作者の戯曲を集めた全集本として出版された。最初にも述べたとおり、これら二つのバージョンのテキストは同じではなく、Q1テキストからF1へ、シェイクスピア自身による「改訂（revision）」があったとされており（注3を参照）、それを前提にして以下の論を進めたい。

これら二つのテキスト相互の違いは、冒頭のタイトルから終幕にいたるまで、全編に渡って見出される。そのことから、シェイクスピアのリア王物語を論じる際に十分注意しなければならない。すなわち、その論者がQ1テキストの『リア王の歴史劇』を用いるか、またはF1の『リア王の悲劇』

か、またはQ1とF1を合わせて編集したもの（いわゆる「合成版」、単に『リア王』と呼ばれる）か、それを表明しないままで行う議論はありえない、と言っても過言ではないだろう<sup>9)</sup>。

本論は、登場人物の一人コーディーリアの動静を追うことによってQ1とF1の違いに光を当て、F1の『リア王の悲劇』においてフランス王国軍はブリテンに来ているか、という問いに答える試みとして叙述をしたい。Q1とF1が別個の戯曲作品として、それぞれの内実が相互に異なる様相を呈することが明らかになるであろう<sup>10)</sup>。

以下、幕、場、行数への言及については次のようにしたい。

第一四折り本 (The First Quarto) の『リア王の歴史劇 (*The History of King Lear*)』は全体が合計で24の場 (Scene) に区切られており、幕 (Act) の区切りはない。これに言及する場合は Stanley Wells (ed.), *The History of King Lear* (Oxford University Press, 2001) を用いて、Qと表示した後に場面の番号と行数を表記する (例えば、(Q,Sc.15,25) は、第15場25行)。

第一二つ折り本 (The First Folio) の『リア王の悲劇 (*The Tragedy of King Lear*)』は全体が5つの幕 (Act) に分けられ、それぞれの幕がいくつかの場 (Scene) に分けられる。これに言及する場合は Jay L. Halio (ed.), *The Tragedy of King Lear* (Cambridge University Press, 1992) を用いて、Fと表示した後に数字で幕の番号、場の番号、行数を表記する (例えば、(F,2.2,45) は、第2幕第2場45行)。

#### 4. 「コーディーリアプロット」

シェイクスピア作のリア王物語は、リアを中心とするメインプロットがあり、それにグロスター伯を中心とするサブプロットが配置され、これら二つのプロットが緊密に入り組んだ劇構成を生み出している。このメインプロットとサブプロットの構成は「歴史劇」のQテキスト、「悲劇」のFテキストで変わりはない。これらの二つのプロットに加えて、メインプロットの一部であるが、独立して第三のプロットと名づけてもよいプロットが

あると思われ、コーディネリアに関連するプロットとして、仮に「コーディネリアプロット」と名づけて言及したい。このプロットには、QテキストとFテキストでは大きな違いがあり、QからFへの一貫した構想に基づく「改訂」の作業が加わった結果であると考えられる。違いは、用いられる一つの単語の修正のような一見して些細なものに見える場合から、一つの場面がまるまる削除されるような大きな違いもあり、QからFへのその改訂の結果として、Qの「歴史劇」、Fの「悲劇」という、大きな違いが生まれている。

そのコーディネリアプロットに特徴的なことは、本人が結婚相手のフランス王とともに国外に渡り、再登場するまでその本人が舞台にしばらく登場しないことである。他の登場人物によって時に応じて間接的に言及されるだけの、いわば「隠れたプロット」となっており、コーディネリアを中心に舞台裏で何かが進行中であると暗示される。

具体的に確認してみよう。コーディネリアは最初の場面で父親であるリアに勘当される（「わしは父としての心づかい (my paternal care) も、血のつながり (Propinquity and property of blood) も、きっぱり捨てたぞ。これからは、永久に、この身にも、この心にも、おまえはまったくの赤の他人 (a stranger) だ」(小田島雄志訳)。その場面には、自分の後に迎える候補の女性を探してリアの王国を訪れたフランス国王がいる。その王は勘当された末娘のコーディネリアをフランス王妃として迎えることを決意し、末娘はそのフランス王と手を携えてその場の最後に退場し、フランスへ渡ることが暗示される。やがてドーヴァー海峡を渡り、フランス王宮に着くはずである。フランス国王の結婚ともなれば、王宮では厳かで華やかな儀式などが催されると期待されるはずだ。しかし、劇中にそういう言及は一切見当たらず、コーディネリアは退場して以後しばらく舞台から姿を消す。シェイクスピアのリア王物語でとりわけ重要な人物のひとりだが、こうして舞台から一時的に不在となるのである。フランス王妃となった女性がフランスで過ごしているのは当然だが、やがて舞台上に再登場する際には、故国に帰国している。

このように、コーディーリアは途中舞台から姿を消している。しかし、そのフランス王国の后について時に応じてその動静を追うことが可能である。というよりは、関係する情報が注意深く提供されている、とすべきであろう。他の人物達の台詞にフランスの后に関する言及が継続的になされるからである。

この「コーディーリアプロット」に限定してテキストの問題を確認しておこう。QとFの違いのうち、まず、

**【QになくてFにある台詞】**

つまり、Fに後から追加された台詞が存在する。これは例に限られる。重要なものとしては、Qの第8場にあった台詞から13行が削除され、その代わりにFで同じ場面にあたる第3幕第1場に新たな台詞が8行追加された、つまり差し替えである。反対に、

**【Qにある台詞やト書きがFで削除または修正された場合】**

であり、この例が圧倒的に多く、例えばQに置かれた一つの場面（Qの第17場）が、Fではその場面全体がそっくり削除される。

これら差し替え、修正、削除の中から、本論の主題のフランス王妃となっているコーディーリアに関係する部分の違いに注目すれば、このキャラクターの理解ばかりでなく、別個の作品として見たQとFそれぞれの作品解釈にも影響を及ぼすことが判明するだろう<sup>11)</sup>。表2はそのコーディーリアプロットにおいて、QとFの違いで重要と思われる箇所を整理している。

コーディーリアが不在となる「隠れたプロット」の部分では、コーディーリアに関連する情報の出所は手紙、伝聞であり、いずれも間接的な情報である。再登場となって以後はもちろんコーディーリア自身の台詞や付されたト書きである。シェイクスピアは例えば『ヘンリー五世』などの歴史劇で、舞台上の一つの場面をフランスに設定し、次の場では場面転換してイングランドに設定するなど、頻繁に場面転換を試みている。リア王の物語の場合も、フランス王国内に場面を移したり、ドーヴァーに移したりして、その場面にコーディーリアを登場させることも可能であっただろう。歴史劇

においては、そのような目まぐるしい場面転換は通常のことであり、物語を追う観客にも特に問題は生じないように工夫されている。しかしリア王の物語では、そういう場面転換は用いなかった。コーディーリアの退場から再登場までは、一通の手紙と、その他の登場人物たちの口頭での報告でその動静を間接的に観客に知らせることにしたのである。

#### [4-a] コーディーリアとケント

コーディーリアがフランス王と共に舞台を去って以後、フランスで后となったコーディーリアに最初に言及があるまでの経緯はQとFで共通である。父親のリアは、「月を単位に代わる代わる両家に居を構える (Q, Sc.1, 123~126, F, 1.1, 126~129)」(大場建治訳)と長女と次女に申し渡したとおり、まず長女ゴネリルとオールバニ公爵のもとに滞在する<sup>12)</sup>。リアは最初に予定したとおり、「百人の騎士や従騎士 (a hundred knights and squires)」(ゴネリルの台詞)を従えていたが、そのゴネリルによってその数は一挙に半分の50人に減らされる<sup>13)</sup>。

これに激昂したリアはゴネリルのもとを立ち去り、次女リーガンを頼って行くことを決める。早速リーガン宛の手紙を準備してケント伯爵(変装している)に託し、自分より先にリーガンとその夫コーンウォル公爵のもとに向かわせる。そのケント伯はグロスター伯の居城に到着したあと、そこに居合わせた次女の夫コーンウォル公爵の怒りを買って、足枷に拘束される。フランスのコーディーリアに最初に言及があるのは、ここである。ケント伯は足枷を付けられたままコーディーリアの名前をあげ、受け取った手紙を身に付けている、と明かす。ただし、フランスやフランス国王への言及はない。

ここでケント伯はコーディーリアからの手紙を身に付けている。フランス国内にいるはずのコーディーリアは、ブリテン国内でケント伯が変装して活動することを承知しており、二人は相互に連絡可能な状況にあることが明らかになる<sup>14)</sup>。

続く場面 (F.3.1, Q.Sc.8) の冒頭では、ケント伯が紳士を相手にして話す台詞によると、ブリテン国内でオールバニ公爵とコーンウォル公爵の間の不和がある。これは両テキストで同じであるが、続くコーディーリアの動静についてのケント伯の情報はQとFで全く異なる。Qのテキストでは、フランス軍がすでにブリテン国の港に拠点を築いており、ケント伯は紳士に至急ドーヴァーまで行って欲しいと依頼するとともに、現在のリアの「お嘆き、自然の情に反する仕打ちを受けて気も狂わんばかりに悲しんでおられる状況」(大場建治訳)を伝えて欲しいと依頼する。誰に伝えるか?この部分の台詞では「誰か‘some’」とあるだけで不明だが、後の台詞から判断して、コーディーリアである。

しかしFでは、Qにあるフランス軍の動静やドーヴァーの地名の部分は削除されている。Fのケント伯は、リアの王国内にフランス国王の密偵が潜んでおり、「わが国‘our state’」の現状がフランス国王に逐一報告されている、という。Qがリアの置かれた現状を紳士を通してコーディーリアに伝えるのに対して、Fでは、リアの現状はこの際に特別に伝えなくてもすでにすべてコーディーリアに伝わっている、と解釈できる。

続いてQ、F共通の台詞の部分では、ケント伯は自分が外見とは違う人物であり、きっと会えるはずのコーディーリアが自分のことを明かしてくれるだろうと述べ、その証拠として財布を渡し、続いてコーディーリアに渡す指輪を託す。これで紳士は納得した様子で、握手をして二人は別れる。さて相手の紳士がコーディーリアに会うためにどこに行けばいいか、Qテキストの場合はドーヴァーへ行けばいい。コーディーリアはすでに上陸しているからである。しかしFテキストの場合、ここの会話だけでは紳士には分からない。どこへ行けばいいのか?<sup>15)</sup>

FとQの両テキストを比べると、Qでコーディーリアがドーヴァーに来ていることが明確であったのに、Fではこの時点でのコーディーリアの所在がひどく曖昧にされており、QからFへの修正が行われたことが明らかである。コーディーリアはフランス国内にいるのか、あるいはどこか別の

所か、もしかしたら国内なのか？ さらに、Qでケントはフランス王国軍が国内のいくつかの港に拠点を築いていると述べるが、Fでは軍隊について何も言及していない。

#### [4-b] グロスター伯が受け取った手紙

以上、Fテキスト第3幕第1場の時点で、フランス王国軍がリアの王国に侵攻し上陸しているかどうか明らかでないこと、それはQテキストからFテキストへの大きな変更であること、を確認した。続いて、Fテキストにおいて、フランス王国軍の侵攻の根拠として取り上げられる台詞を取り上げたい。すなわち、コーンウォール公爵の「フランス軍が上陸した」‘The army of France is landed.’という台詞 (F,3.7,2~3, Q,Sc.14,2) であり、そしてオズワルドの「上陸した軍のことを公爵にお伝えした」‘I told him of the army that was landed’ という台詞 (F,4.2,4, Q,Sc.16,4) である。この二つの台詞を根拠にして、Fテキストでもフランス王国軍がリアの王国に侵攻していると論じられているが、その根拠が果たして確かなものなのか、考察する試みである<sup>16)</sup>。

上述の台詞にいたる経過を具体的に追ってみよう。その始まりはF,3.3, Q,Sc.10でグロスター伯が一通の手紙を受け取ったことを、息子のエドマンドに内密に明かす台詞である。グロスター伯はここでその手紙の差し出し人について言及しないまま、その手紙の文言を使っているとみなされるが、Fテキストで、軍勢の一部 (part of a power) がすでに「進軍している (footed)」と述べる (F,3.3,11)。ところがQテキストではここは‘landed’が用いられる (Q, Sc.10,13)。つまり、Qの‘landed’が、Fで‘footed’に修正された。Qの‘landed’は、「(海から)上陸した」ことを意味し、四方を海に囲まれたブリテンであるから、その「軍勢の一部」は国外から来たことが暗示される。ところがFテキストの‘footed’の場合、「上陸」というよりは、「進軍」の暗示が強であろう<sup>17)</sup>。その場合「上陸」したわけではないから、国外から外国の勢力が侵攻したかどうかは明らかでなく、どこの軍隊か曖

味になる。ここで言及される「軍勢の一部 (part of a power)」がコーディリアと関係するか、さらにフランス王国軍なのかどうか、この時点では何も確認できない。Qの‘landed’がFで‘footed’に修正されたことで、その軍が外国軍であるとは特定できないよう曖昧化されている<sup>18)</sup>。

すでにケント伯が紳士に述べた台詞においても、QからFへの修正によって、フランス軍とコーディリアがドーヴァーにいと暗示する情報がFで削除されていることを確認した。フランス軍が侵攻していないとすれば、この時点でその「軍勢の一部 (part of a power)」は、外国軍による「侵略」ではなく、国内で集められた軍勢であり、内乱を暗示するであろう。それは現在の国内を掌握する側——オールバニ公爵とコーンウォル公爵——から見た、「反乱軍 (rebellion)」(Gray Taylor, 注28参照)である。

続いて別の場を一つはさんで、F,3.5, Q, Sc.12になると、エドモンドとコーンウォル公爵の対話がある。エドモンドは「これです、父グロスター伯が話をした手紙は (This is the letter which he spoke of)」と言い添えてコーンウォル公爵にそれを渡し (F,3.5,8, Q, Sc.12,9)、「父がフランスのために図る内通者であることはあきらかです (小田島雄志訳)」と密告する。しかし、前の場面では、グロスター伯はその手紙が他人の手に渡らないように、「部屋 (closet) に錠をしておいた」(大場建治訳)<sup>19)</sup>と明確に述べていた (F,3.3,9~10, Q, Sc.10, 10~11)。だとすれば、エドモンドは父のその手紙そのものを持参することはできない、とみなすべきであろう。エドモンドがコーンウォル公爵に手渡す手紙は、エドモンドの捏造ではないのか (または、「盗み出した」という説もある)<sup>20)</sup>。

エドモンドの密告を聞くコーンウォル公爵の方は、その手紙の内容 (the matter of this paper) の真偽を確かめないままであり、「事実であるかどうかはともかく (true or false) (F,3.5,14, Q, Sc.12,15)」という言い方をする。ところが公爵は続いてF,3.7 (Q, Sc.14)になると、エドモンドから受け取ったその手紙 (Fの編者Halioによる解釈 (p.197)、Qの編者Stanley Wellsはこの時点で誰がその手紙を所持しているか不明としている (p.204))をゴネリル

に見せながら、「フランス軍が上陸した (The army of France is landed) (F,3.7,2, Q,Sc.14,2) と断言し、フランス軍による侵攻が事実であるとする口ぶりに態度を変える。Qの場合は、グロスター伯がすでに‘landed’ (上陸した) とエドモンドに口頭で伝えていたのであるから、コーンウォール公爵はそれを伝え聞いてそのまま述べたことになる。しかしFの場合は、グロスター伯の言ったのは‘footed’ (進軍している) だったのに、エドモンドがそれを‘landed’ (上陸した) としてコーンウォール公爵に伝えていたことになるだろう。Fテキストの編者Halioは、グロスター伯がエドモンドに語る台詞がQの‘landed’ からFにおいて‘footed’ に修正されたことは注記しているが、Fのこの‘footed’ は、‘landed’ の意味だとしている (Halio, p.180)。しかしFにおける、‘landed’ から‘footed’ への修正が何の意図もなく行われたとは考えにくく、QからFへ多くの修正が行われた際の、小さいけれども重要な一環とみなすべきではないか。フランス軍が来ているかどうか、に関わるからである。

QではSc.12からSc.14まで、Fで第3幕の第5場から第7場までは、途切れない連続する場面であり、コーンウォール公爵が自身でフランス軍侵攻に関して「事実であるかどうか」を確認する場面はない。Qでは公爵がとくに確認しなくてもフランス軍上陸は事実として物語が進行している。しかしFの物語の流れに従うならば、コーンウォール公爵が‘landed’ と断言するのは、グロスター伯の言った‘footed’ と違う、間違っただけの情報である (シェイクスピアの戯曲で一般論としては登場人物の台詞は言われたとおりに受け止めるのであろうが、矛盾する情報がある場合にはそうとは限らないだろう)。Fでは、フランス軍が来ているかどうか、この時点で明らかでない。公爵は、エドモンドが手紙を証拠物件として差し出して行った父親密告に伴う誤情報を鵜呑みにして、あるいは悪用して、ここで披露し、グロスター伯を敵のフランス軍と通じた「裏切り者」に仕立てたとみなせるであろう。ただし同じ「裏切り者」であっても、Qの場合はフランス軍と通じる裏切りりであるし、Fの場合は内乱軍と通じる裏切りりとの暗示がある。

グロスター伯が「裏切り者」であることをFがここで強調したことを裏付けるテキスト上の事実がある。Qの第14場の冒頭 (Sc.14,3) で公爵がグロスター伯を名指して用いる単語は ‘villain’ (悪党) であるが、それがFでは ‘traitor’ (裏切り者) に修正されたからである<sup>21)</sup>。その後この場面ではこの ‘traitor’ (裏切り者) という単語がコーンウォール公爵とその夫人リーガンによって何度も繰り返される。直後には「裏切り者 (traitor)」に仕立てられたグロスター伯が両眼を抉り取られるという凄惨な場面が続く。

同じ場面には、ゴネリルの執事であるオズワルドがもたらす情報がある。それによると、35～6名ほどの騎士 (knights) たち、および数名のグロスター伯の家臣たち (the lord’s dependants) が、リアを連れてドーヴァーに向かったという。その騎士、家臣たちは、ドーヴァーに「十分に武器を整えた味方 (well-armed friends)」がいる、と声高に叫んでいる。Qの場合は、この「味方」とはコーディーリアと一緒にいるフランス王国軍であることが明らかである。ところがFでは、先に確認したとおりコーディーリアがドーヴァーにいるかどうかはいまだ未確認であるし、ドーヴァーにいるというその「味方」に上述の35～6名ほどの騎士、家臣たちが加わることは確かであろうが、その「味方」にフランス王国軍が含まれるかどうかは確認できない。

続いてコーンウォール公爵はグロスター伯を拷問しながら詰問し、手紙の内容に関するエドマンズの誤情報を根拠にして、「フランスからどんな手紙」を手に入れたか、「この王国内にさきごろ上陸した (late footed) 謀反人 (traitors) たちとどんな陰謀を企んでいるのだ?」と決め付け、問い詰める。コーンウォール公爵は謀反人扱いのグロスター伯とドーヴァーにいるというその「味方」を結び付け、その「味方」も「謀反人たち」とみなす。この ‘footed’ はQもFも、ともに ‘footed’ であり、Qの場合はすでに「上陸 ‘landed’」 (Sc.10でエドモンドに対するグロスターの言葉) を果したフランス王国軍が、続けて「進軍 ‘footed’」しているのだし、Fの場合はまだ正体の確認できない「軍隊の一部」の「進軍 ‘footed’」が続いていることになるだろう。グロスター伯はその手紙の差し出し人が「中立の立場の人物の手紙であっ

て、けして敵方のものではない (one that's of a neutral heart, /And not from one opposed)」(大場建治訳)と抗議する。われわれがグロスター伯のこの発言を疑問視すべき理由は何もなく、文字通りに受け止めるだろう。しかし公爵は、それがフランス軍だと決め付けて聞く耳を持たない。

ここでコーンウォール公爵が用いる「謀反人」という用語について関連させて指摘しておこう。グロスター伯がコーンウォール公爵を「ご主人」と呼ぶことがあり<sup>22)</sup>、その点でこの場面のグロスター伯は主人であるコーンウォール公爵にとって自分を裏切る「謀反人 (traitor)」であると言っていいだろう。しかし公爵はフランス軍を念頭に置いて「さきごろ王国内に上陸した謀反人たち (the traitors /late footed in the kingdom)」という言い方をしている。この言い方は明らかに言葉の使い方が間違っている。「上陸する」のはフランス軍であろう、しかしフランス軍は侵略戦争における「敵軍」であって、「謀反人たち」ではないからである。コーンウォール公爵の言葉遣いそのものが、問題になっているのがフランス軍なのかどうか、をめぐって揺れている。

これに連続する場面 (F.4.2, Q, Sc.16)で、オズワルドが「上陸した軍隊 (the army that was landed)」についてオールバニ公爵に伝えた、とゴネリルに報告する。この情報は、オズワルドがゴネリル、エドマンドと一緒にオールバニ公爵の館にたどり着いて伝えたものである。以前にコーンウォール公爵が「この手紙を託します」(F.3.7.2, Q, Sc.14.2)と述べてゴネリルに手紙を手渡す際に、「フランス軍が上陸した (The army of France is landed.)」と言い添えた伝言が伝わったとみなせる。コーンウォール公爵がオズワルドに「奥方[ゴネリル]に馬の用意を」と命じ、その馬でゴネリルはオズワルド、エドマンドと共にオールバニ公爵の館に到着するとみなせるからである。これ以外には「上陸」の情報についての言及はない。またこの時点でゴネリルは公爵にまだ会っていないので、オズワルドがゴネリルから手紙を預かって公爵に渡したものであろう。この手紙は、エドマンドからコーンウォール公爵に手渡された手紙であり、続いてゴネリルに手渡されたものである (な

お、F編者のHalio、Q編者のWellsもこの手紙がエドモンド由来のものであるとして一致している)。コーンウォール公爵はその手紙の内容が事実であるかどうか明らかではない (true or false) としながら、「フランス軍が上陸した」と断言したり、さらにはその上陸した軍隊が「謀反人たち」であると言ったり、軍勢の実体は何なのかは未だに揺れている。

以上のような成り行きの後、Fテキストでは直ちにF.4.3に場面転換して、コーディーリアの再登場となる。確認しておく、Fでその時点までにもたらされたフランス軍が上陸したという情報は、元をたどればグロスター伯の手紙を根拠としてエドモンドがコーンウォール公爵に語ったものだけである。公爵が自ら「事実であるかどうかはともかく」と言うとおりの、Fテキストを用いて上演する場合、その情報は根拠が明らかでない。フランス軍かどうか、未だ確認できていないのである。

Qテキストではコーディーリアが再登場する前に、コーディーリアとともに行動している軍勢がフランス軍の侵攻であることが強調される。すなわち、Sc.16のゴネリルが、「フランス王がわが国土に軍旗を翻して、あなた(オールバニ公爵)の玉座を脅かしている」(Q, Sc. 16)と述べて夫の優柔不断を責めるが、この台詞がFで削除される。Qのこの台詞が「あなたの玉座」としていることから、ゴネリルにとってオールバニ公爵がすでに国王であるとみなして、国と国の戦争へと事態が進展していることを暗示する。さらに、Fで削除されることになる場面(Q, Sc.17)で、変装したケント伯と紳士が登場し、紳士からケントに伝えられる情報がある。フランス王が急遽帰国せざるを得ない事情があって「フランス国元帥ラ・ファー閣下」が総指揮官となったこと、オールバニ公爵とコーンウォール公爵の軍勢がすでに進軍中であること、である。このようにして、Qテキストでは、フランス軍と両公爵の軍がまさに面目をかけて全面戦争に突入する前の緊迫した様相が伝わると言っていいただろう。Qでフランス王が率いるフランス王国軍であると明確に指示する箇所があったのに、それらがすべてFで削除されている。だとすれば、Fにおいて軍勢の内実が明確でない場合に

おいては、それをフランス軍と決め付けることはできないのではないか。QとFが「二つのテキスト」、それぞれ「別個のテキスト」であるとするれば、Fを解釈するときに、Qにおいてのみ提供される情報を前提としないことが必要ではないか。

#### [4-c] コーディーリア再登場

これに続く場面でコーディーリアが再登場する。すでに確認したとおり、Qではその登場前に一つの場面 (Sc.17) が置かれ、フランス国王が急遽帰国したこと、ラ・ファー閣下が軍を指揮していることが伝えられ、コーディーリアに同行してフランス軍が来ていることが明らかである。しかし、Qに付された再登場のト書きでは、「後のコーディーリア、医師、その他が登場 (Enter Queen Cordelia, a Doctor, and others)」とある。Gary Taylorが指摘するように、ここで登場する「その他 (others)」は兵士ではないと考えた方がいいだろう<sup>23)</sup>。というのも、同じQの別の場面 (Sc.24) では、兵士が登場する場合には明確に‘soldiers’というト書きがあるからである。かくてQでは、フランス王国の軍勢が来ていることは明らかであるが、軍勢そのものはコーディーリアとは別の場所を拠点にして動いており、コーディーリアは軍隊とは距離を置いていることが暗示される。

ところが、Fにおいてコーディーリアが再登場する同じ場面 (F.4.3) のト書きは、「鼓手、旗手を伴い、コーディーリア、紳士、兵士達が登場 (Enter with drum and colours, CORDELIA, GENTLEMAN and SOLDIERS)」とある。コーディーリアが軍を率いているという暗示がある<sup>24)</sup>。しかし、このFのト書きのSOLDIERSがどのような兵士か、どこの国の兵士か、Fテキストだけを追ってきた場合は明らかではない。再登場する前、すなわちFで4.2までに言及されているのは、軍勢の一部 (‘part of a power’ 3.3.13) がブリテン国内を「進軍している (‘footed’ Qでは ‘landed’)」(グロスター伯の台詞) こと、その軍勢についてコーンウォール公爵がエドモンドから得た情報として「フランス軍が上陸した (The army of France is landed.)」(3.7.2~3) と決

め付けていることである。コーンウォール公爵は少し前には「事実であるかどうかはともかく (true or false)」と言っていたのであり (F,3.5,14)、公爵がエドマンズの示した手紙の内容を事実であるかどうか確認せずにそのまま述べる、根拠のない決め付けなのだ。この確かでない情報が、続いてゴネリル、オズワルドを通じてオールバニ公爵へと伝えられる。G. TaylorはF,4.3のト書きをもとにコーディーリアが再登場する時点で、「Fテキストの舞台進行をすることによって、ドーヴァーに上陸した軍を率いているのが [フランス王でなく] コーディーリアであることも明らかにする利点がある」<sup>25)</sup>と述べており、Fテキストでも、軍隊が「上陸 (landed)」していて、それがフランス軍であるとの前提で論を進めている。しかしQとFは別個のテキストだとすれば、Fテキストにおいて軍隊がドーヴァーで上陸したかどうかは明らかではないうえ、たとえ「軍勢の一部」が「進軍している」としても、それがフランス軍であるかどうか曖昧にされているのである。

コーディーリアはこのようにして再登場するやいなや、「百人隊 (century = 古代ローマの軍編成で用いられた、兵士数の単位)」を送り出し、父を見つけるべく周辺をくまなく搜索するように指示する。この兵士数の規模について、Q (Sc.18) では複数形で定冠詞付きの「指定した百人隊数個 (The centuries)」であったものが、F (4.3,6~8) では単数形の「百人隊を一個 (a century)」に修正されている。兵士の数として、Qの「百人隊数個」は大きな数であるが、Qでフランス軍が遠征しているのであればそれだけの規模も納得がいく。一方でFの「百人隊一個」の兵士数でもかなり大きな数であろう。父親を探すためにそれだけの人数の兵士に指示を出せるのは、たとえフランス軍が来ていなくとも、軍として見合うだけの数の軍勢がFのコーディーリアの側に付いて身近に控えている、という暗示があると考えられる。この後Q、Fともに、コーディーリアは使者から「ブリテン軍 (British powers)」がこちらに進軍してくると報告を受けると、「わが軍も戦闘態勢が整っている (our preparation stands / In expectation of them)」と即座に答える。Qではフランス軍とブリテン軍、Fではコーディーリアの軍と

ブリテン軍、まさに決戦のときが迫っている。Fのコーディーリアの軍がどのような兵士たちで構成されるのか、その内実は依然として明確ではない。

続くFの5幕1場から3場まで、QではSc.22からSc.24まで、まさにその両軍の戦闘が開始され、最後はエドモンドがリアとコーディーリアを捕虜にするまでが舞台で演じられる。この連続する場面の戦闘経過のなかで、Qで登場する軍勢はフランス軍であると明確にト書きで指示される。しかしFではそのト書きが修正され、フランス軍かどうか明確でない。

具体的に見てみよう。まず、F,5.1、Q,Sc.22の場面では、オールバニ公爵がQ、Fともに、王とコーディーリアが合流したことで、そこに「わが国の圧政に不満の声をあげる者」たちが加わっている、と述べる。コーディーリアの側には、さまざまな方面から兵士たちが集まってきている、とオールバニ公爵が把握していることになるだろう。だが、そのオールバニ公爵がQテキストSc.22,27で「フランス王がわが国を侵略している以上、自分にも関わる (It touches us as France invades our land.)」と述べる台詞が、Fでは削除されて見当たらない。フランス王またはフランス軍に関する言及が意図的に削除されたとみなすべきであろう。かくて、Fでコーディーリアと一緒にいる兵士たちがフランス軍かどうか分からないのであって、軍勢の素性を特定しないよう修正が加えられたことが明らかである。Qのオールバニ公爵の続く台詞は、「王 [リア] は大胆に支援者たちと行動をともにしている。大義名分があれば反乱は起きるもの」(テキストが不安定で解釈が難しいが、Oxford版のStanley Wellsによる読み)と述べており、公爵はリアが依然として「王」であること、リア側の「反乱」に「大義名分」があることを認めている。Qの場合は、フランス軍が来ているだけでなく、反乱軍もまた蜂起していることになる。

続く場面Q,Sc.23のト書きは、「フランス軍が舞台の上を通り過ぎる (The powers of France pass over the stage)」と指示する。Fの同じ場面にあたるF,5.2では「鼓手と旗手を戦闘に、リア、コーディーリア、兵士たち登場 (Enter with drum and colours, LEAR, CORDELIA and SOLDIERS)」と修正されてお

り、「フランス軍」が、「兵士たち」に修正される。この「兵士たち」について Gary Taylor は、「国籍を示すものはない (without indication of nationality)」として、フランス軍の兵士達とは限らない、と指摘する<sup>26)</sup>。エリザベス朝演劇の舞台では、登場する兵士達はその衣装によってどこの国の兵隊か判別できるよう、依頼があれば演出できた、ともいう<sup>27)</sup>。しかし F テキストにおいては、フランス軍であるともないとも断言できない。

以上のとおり、Qにおいてコーディーリアとともにいる軍勢がフランス軍であることが明確である。ところが F では、そのことに関連する台詞、ト書き、時には場面全体まで、注意深く削除、またはフランス軍を暗示しないように修正されていることが判明した。その修正は一貫した意図のもとに行われていることが明らかである。F でコーディーリアと一緒にいるのはフランス軍ではない、とまで言い切れなくても、フランス軍と特定されないようにしようとする、Q とは異なる F に独自の構想があることが読み取れるのではないか。F は F として独自の統一のあるテキストとして受け止めることが重要であり、Q やそれ以前のリア王の物語に見出される物語上の情報を F に持ち越すのは不適切なのではないか。Gary Taylor は、F において「コーディーリアは ‘invasion’ でなく ‘rebellion’ を率いているように見える (seems)」<sup>28)</sup> と述べる。しかし、「率いているように見える」のではなく、「率いている」のはまさに ‘rebellion’ とするよう、Q から F への「改訂」が行われたのではないか<sup>29)</sup>。Urkowitz もまた、グロスター伯の台詞が ‘landed’ から ‘footed’ に修正されたことを確認する時点で、‘rebellion’ が暗示されると述べる<sup>30)</sup>。(ただし、Urkowitz もまた最終的にはフランス王国軍が侵攻しているとする。)

## 5. コーディーリアの帰還～その理由

コーディーリアは再登場する場面で、自分がなぜ帰還したのか、その動機について言及する。その言い方は、その場面にはまだいない父親、リアに語りかけるかのようなのである。「ああ、お父様、私がおこへまいりました

のもあなたのため／・・・軍を起こしたのも野心のためではなく、愛のため／ご老齢のお父様への愛と、その大権を守りたいため (O dear father, It is thy business that I go about; No blown ambition doth our arms incite, But love, dear love, and our aged father's right.)」(Q,Sc.18,24~29,F.4.3,23~28)小田島雄志訳)だと言う。最後の文の主語は 'love', 'our aged father's right' であり、その二つが 'our arms' を 'incite' している、ということである。全体としては、「愛と老いた父の権利が、われわれの武器を取らせている」ということになる(ちなみにコーディリアが 'love' の後に繰り返す 'dear love' は、「大切な愛」である)。これが、帰還したコーディリアが自分の「武器をとる」行動に関わる動機について述べる言葉である。

これらの言葉は一般的な言い方にとどまるが、QとFではニュアンスが異なることを確認しておきたい。Qの場合、フランス軍が同行してきていることで、'our aged father's right' は王国レベルでの「権利」に関わるだろう。シェイクスピア以前のリア王物語における展開と同じで、王国を奪い返すことが権利の回復として目標となる。しかしFの場合には、フランス王国軍が来ていないとすれば、その「権利」は王国とは必ずしも関わらないかもしれない。コーディリアの同じ台詞中に 'No blown ambition doth our arms incite' (思いあがった野心の拳兵ではない(大場訳))とあるのは、Fにおいては必ずしも王国を奪還してリアを復位させることを意図しないと読めるだろう。

この場面に至るまでに、コーディリアを動かして武器を取らせるに足る、どのような動機が挙げられているだろうか？それらを追ってみたい。

最初の場面でコーディリアはフランス王に促されて姉たちと別れるときに、「お姉様たちのことはよく分かっています。妹の身としてその欠点をあげるのは気がすすみません(小田島雄志訳)」と語りかける。ただこれだけでは武器をとって姉達に立ち向かうほどの動機にはならないだろう。

次に動機に関わると思われるのは、F.2.2, Q.Sc.7のケントの台詞で、QとFで同じ文言である。コーディリアは、ケントが変装して活動しリア

に仕えていることを知っており、ケントはコーディーリアが「この乱れた世のなかを救い、その傷を癒してくださるだろう (小田島雄志訳)」と言う。ここでも言葉遣いは不明確である。コーディーリアがケントと連絡をとっていることは分かる。だが、ここで言われる ‘this enormous state’ (この混乱の坩堝)、『losses’ (損失) (大場建治訳) とは何だろうか？ ブリテン国内の現状や、リアの置かれた現状に言及しているらしいが、具体的には分からない。これより前の場面で、リアとゴネリルの葛藤、エドモンドによる父親グロスター伯を陥れるたくらみなどの場面があるので、観客にはそれらの場面への連想が起きることは確かである。しかし、これでは帰還の理由にはならないだろう。

ついでと言及があるのは、F,3.1, Q,Sc.8で嵐の中をケントが紳士と落ち合う場面である。ここは前にも触れたとおり、QとFでテキストに異同があり、錯綜した記述になるが、コーディーリアの帰還の動機という観点から考察してみよう。

Qテキストの場合では、

- ①オールバニ公爵とコーンウォール公爵の間に不和があること、
- ②すでにフランス軍が「要所要所の港にひそかな拠点を築き、いまにも公然と軍旗を翻そうとしている」(大場訳) こと、
- ③ケント伯は紳士にドーヴァーに行くよう依頼し、リアが窮地に陥っていることを伝えてもらいたいこと (現在のリアの置かれた状況——荒野を彷徨している——を、コーディーリアが未だ把握していないとの暗示がある)、
- ④その上で、気のすまない紳士を説得し、ドーヴァーでコーディーリアに会ったら、自分の正体分かるように指輪を渡すこと。

Qのケント伯と紳士の対話でこれらのことが分かる。すでにフランス軍はブリテン国の港内にいるのである。コーディーリアもドーヴァーに到着していることが暗示される。フランス軍がどういう目的で海を渡ってきたかについては分からないが、フランス軍が上陸するとすれば、それは侵略

であり国と国の戦争につながる。

Fテキストではどうか。

- ①両公爵の間に不和があること、これはQと同じ。
- ②ブリテン国内の現状はフランス王がブリテンに派遣したスパイによってすべて伝わっていること。リアが荒野を彷徨するほど窮状に追い込まれていることもフランス王に伝わっているとの暗示がある。
- ③ケント伯は紳士がコーディーリアに会った場合に自分が怪しい者でないことと正体が分かるように指輪を渡す（どこでいつ会うかは分からない）。

これらがケント伯と紳士の対話から暗示されるが、Fではフランス軍が来ているかどうかは何も触れられない。フランス王はブリテン国内の有様をスパイを通じて何もかも把握している、リアが荒野を彷徨している現状も伝わっている、ということであろう。コーディーリアが帰国することになるのは、フランス王がスパイを通じて把握している詳細な情報があるからだと考えられる。しかしそのFの場合、フランス王はそもそもコーディーリアに同行しない。後に(F.4.3)で宣言するとおり(「わたしがここにまいましたのも・・・」)、コーディーリアは自分一人で帰還している。Qでも同じ台詞があつて確かに「わたし」一人であるが、フランス王が途中でやむを得ない事情により帰国したからである。

そうすると、「わたしがここにまいました・・・」のをフランス王が許した、という台詞の意味をそれぞれFテキスト、Qテキストで異なる解釈ができるだろう。Qの場合、フランス王はブリテン国王位の奪還の試みを後に許したうえ、当初はみずからもその侵略的軍事行動に加わったが、事情があつて途中でフランスに帰り、主たる軍勢はフランス国元帥ラ・ファー閣下の指揮のもとにある。コーディーリアは自分の軍隊 (her army) を持っているようだが、その軍勢とも別の行動をとり、兵士とは違う医師などを連れて再登場する。コーディーリアは、自分の行動が「思い上がった野心ではない (no blown ambition)」(大場訳)と宣言し、ブリテン国の王位奪還などは目的としていない口ぶりである。

Fの場合は、フランス王は今回の軍事作戦にフランス王国軍を派遣しないけれども、オールバニ公爵に対する反乱をコーディーリアが率いることを許したことになるだろう。Fにおいても、フランス王が王国軍を整えて派遣し、それをコーディーリアに率いさせたのだとして、‘Therefore great France/ My mourning and importuned tears hath pitied.’の台詞を読む論もある<sup>31)</sup>。しかしFにおいて一貫してフランス王国軍への言及が削除されていることを考慮するならば、フランス王国軍が確実に軍事侵攻しているとは言い切れないであろう。Fの新構想では、フランス王国軍の存在を消去することで、国と国の間の戦争という側面を悲劇の物語から消そうとしたと考えられる。 [ (2) に続く ]

表 1

|                         | Everyman's Library 版<br>([ ]内の数字はBullough)  | Geoffrey Bullough (ed.), <i>Sources</i> 所収  |
|-------------------------|---|---|
| 作者、書名、<br>戯曲名、<br>成立年代等 | Geoffrey of Monmouth, (1100頃～1155)<br><i>History of the Kings of Britain</i> (c.1138～9)<br>原典はラテン語、シェイクスピア当時、英訳はなかった。   | Raphael Holinshed (1525? - ?1580)<br><i>THE SECOND BOOKE OF THE HISTORIE OF EN-<br/>GLAND</i> 初版1577年<br>増補第2版1587年 (Shakespeareの愛読書とされる<br>(大場p.222))                                    |
| 物語の年代                   | ヘブライの預言者 Isaiah, Hoseaの時代<br>Romulus, Remusによるローマ建国の頃<br>(歴史上いずれも前8世紀)  | Leirの即位が、‘in the year of the world 3105, at<br>what time Joas reigned in Juda’<br>(‘3105年’は、紀元前656年にあたる (Wells,p.34))   |
| 王の名、治世                  | King Lear<br>60年間ブリテン王国を統治  | King Leir<br>復位後を含めて40年間統治  |
| 3人娘<br>結婚相手の名と<br>地位    | Goneril = Maglaunus, the Duke of Scotland<br>Regan = Henvin, the Duke of Cornwall<br>Cordelia = Aganippus, King of the Franks   | Gonorilla = Henninus, the duke of Cornwall<br>Regan = Maglanus, the duke of Albania<br>Cordeilla = Aganippus, one of the princes of Gallia<br>(Aganippusはこの当時ガリアを支配した12人の王<br>の一人、と説明あり。) |
| 王国分割の事情                 | 当初は3分割の予定。結局、当面は二人に‘one<br>moiety of the island’ずつ与え、リアの死後は二人に<br>ブリテン王国全体を。  | ‘His land should be diuided after his death, and the<br>one halfe thereof immediatelie be assigned to them<br>in hand’  |
| 末娘の結婚                   | Aganippusは使節を送って結婚を申し込む。  | ‘[Aganippus] sent over to hir father, requiring that he<br>might have hir to his wife’ 使節を送って求婚。  |
| 分割後                     | Learがしばらく統治するが、義理の息子の二人の公<br>爵が反乱を起こし、王国を奪う。  | Leirが老いたのちに義理の息子の二人の公爵が武<br>装蜂起し、国 (the land) の支配権 (gouernance) を奪<br>い取る。  |
| その後の父の処遇                | Duke of Scotlandが40[60]人の騎士 (knight) をつけ<br>る、やがて20[30]人に減らす。King (リア)は次女の<br>所へ行くが、やがて騎士5人に。再び長女の所で1<br>人の騎士と過ごす。やがて1人の騎士とともにガリア<br>の末娘のもとへ行く。末娘は父の身なりを整えさせ、<br>40人の騎士を随行させて国王にふさわしく迎えた。 | リアは自分の領地を与えられて過ごす、それは公<br>爵たちによって次第に減らされ、やがて召使も一人も<br>ない状態に陥る。<br>リアは自分の土地を逃れ、ガリアへと渡る。末娘は父<br>に身なりと随行員を整えさせ国王待遇にして迎えた。  |
| 戦争、反乱                   | ガリア王はガリア全域から騎士を集め義理の父の復<br>位を援護。リアはガリア王、末娘と共に兵を率いてブ<br>リテンに侵攻、公爵たちに勝利し復位。復位後3年<br>目に死亡、末娘がその後5年間統治、甥たちが反乱、<br>末娘は幽閉され、獄中で自殺。  | Aganippusは軍勢を集めてBritaineに侵攻、公爵二<br>人を殺す。Leirは復位して2年間統治し、最初の即<br>位後40年で死ぬ。その後末娘が統治し、夫のガリア<br>王もその間に死ぬ。5年の統治後、甥たちが反乱を<br>起こし、末娘は捕らえられ獄中で自殺。   |
| madness                 |   |   |
| 宗教                      | ‘all of the gods of heaven’と呼びかける、異教徒の<br>世界  | “gods” 複数の神々、異教徒の世界   |

『リア王の悲劇』の新構想 (1) —フランス王国軍は来ているか—

| Bullough, <i>Sources</i> 所収  | Stanley Wells (ed.)<br>Oxford U.P.   | Jay L. Halio (ed.)<br>Cambridge U.P.  |
|--|--|---|
| Anonymous<br><i>The True Chronicle Historie of King Leir and his Three Daughters; Gonerill, Ragan, and Cordella</i><br>1605年5月8日に出版登録  | William Shakespeare<br>First Quarto 1608年出版<br><i>The Historie of King Lear</i>  | W. Shakespeare<br>1623年出版のFirst Folioに<br>収められた <i>The Tragedy of King Lear</i> |
| 不明   | 不明   | 不明  |
| King Leir  | King Lear<br>自分で年齢80歳越したと  | 同   |
| Gonorill = the King of Cornwall<br>Ragan = Morgan, the King of Cambria<br>Cordella = the Gallian King                                  | Gonoril = Duke of Albany<br>Regan = Duke of Cornwall<br>Cordelia = King of France                                      | 綴り“Gonerill”  |
| ‘My Kingdome will I equally deuide/ Twixt thy[Cordella’s] two sisters to their royall dower...’  | 全体を3分割の予定だったが、結局は2分割となり、長女と次女に配分。  | 同   |
| 巡礼に変装して Brittany に来たガリア王が Cordella に出会い、身分を明かして求婚、儀式は帰国してから。   | 王国分割の場にフランス王が来ていて、求婚。  | 同   |
| Leir は直ちに長女の館に滞在するので、分割後の Leir の統治はない。   | リアは「国王の名、格式の一切」のみ保有。分割後直ちに長女の居所に滞在。  | 同   |
| 長女は父の滞在に耐えられない。年金(‘pension’, ‘allowance’)を半分に減らし、残りも奪う。Leir は次女のもとへ行くが、次女は歓迎の様子を示しながら、陰で刺客を雇い父親の命を狙う。Leir は一人の伴とガリアに渡航、そこでガリア王、末娘と出会う。 | リアは最初騎士100人を従えたが、2週間後にゴネリルによって50人に減らされ、その後の言い争いの中でリーガンが25人、ゴネリルが10人、5人と減らすと主張、ついにリーガンが1人も必要なしと言い、リアは道化、ケントとともに荒野に出て行く。 | 同   |
| 軍勢を集めたガリア王は、Leir、Cordellaとともにブリテンに侵攻(invasion)、戦闘に勝利し、Leir は復位。Cornwall, Cambria, Gonorill, Raganらは皆自分の領国に逃げ帰る。                        | フランス王がフランス軍を率いてブリテンに侵攻、末娘も同行するが、フランス王は途中で帰国。フランス軍は戦いに敗れ、リア、末娘とも死ぬ。   | フランス軍のブリテン侵攻かどうか曖昧。末娘は先頭に立って戦い、リア、末娘とも死ぬ。                                       |
|  | Lear’s madness introduced  | 同   |
| キリスト教世界(Christendom)、“God” “Saviour” “Jehova”  | ‘Jove, Apollo’ などと呼びかける異教徒の世界  | 同   |

表2

コーディーリアの動静を伝える台詞やト書きを、劇中の関連する情報とともに以下の表で追った。

- ・ Q1、F1の異同を対照して表示。共通する場合は同一枠。[ ]内は筆者コメント。  
(空欄は対応する台詞、ト書き等がないことを表わす。)
- ・ テキストは、「第1四つ折本」をQ1、「第1二つ折本」をF1として略称で表記。
- ・ Q1の場 (Scene) 番号 (1~24)、F1の幕と場 (1.1~5.3) の表記は次のテキストによる。  
Stanley Wells (ed.) *The History of King Lear*, Oxford University Press, 2001.  
Jay L. Halio (ed.) *THE TRAGEDY OF KING LEAR*, Cambridge University Press, 1992.

| Q1場<br>F1<br>幕、場 | 情報源   | Q1、F1に共通の内容   |  |
|------------------|---|---|--|
|                  |   | Q1のみの内容   | F1のみの内容  |
| Sc.7<br>1.2      | ケント伯が持つ<br>コーディーリア<br>の手紙                         | コーディーリアはケント伯が変装して国内で活動していることを承知している。  |  |
| Sc.8<br>3.1      | ケント伯が紳士<br>に伝える台詞                                 | オールバニ公爵、コーンウォール公爵の間に不和がある。  |  |
|                  |   |   | 王国内にフランス王のスパイが潜み、<br>王国内の情勢をフランス王に伝えている。                               |
|                  |   | フランス軍がブリテン国の港に拠点<br>を築き、旗を掲げる構え。  |  |
|                  |   | ケント伯は紳士にドーヴァーまで行っ<br>てリアの現在置かれた状況を伝える<br>よう依頼 [誰に伝えるか不明]。   |  |
|                  |   | ケント伯は自分が外見以上の者だと述べて財布を渡し、コーディーリアに<br>必ず会えるはずと念を押して指輪を渡す。[Q1ではドーヴァーで会えること<br>が類推可能だが、F1ではどこで会うか指定されない]                     |  |
| Sc.10<br>3.3     | グロスター伯の<br>台詞と伯が所<br>持する手紙 [差<br>出人について<br>は言及なし] | 両公爵の仲違い   |  |
|                  |   | 軍隊の一部が上陸している (part of<br>a power already landed) [「上陸」<br>であるから、フランス軍を暗示する]   | 軍隊の一部が進軍している (part of<br>a power already footed) [「進軍」<br>であるから、国内の軍隊] |
|                  |   | グロスター伯「その手紙を部屋 (closet) に隠して錠をした」   |  |
| Sc.12<br>3.5     | エドモンドが手<br>紙をコーンウォ<br>ール公爵に渡し<br>て父を密告            | 「父がフランスのためにを図る内通者である」と密告。<br>公爵は、「事実であるかないかはともかく」として事実確認しない。[手紙は<br>エドモンドによる捏造か、または「盗んだ」(Stanley Wells (Q1) の説) か、不<br>明] |  |
| Sc.13<br>3.6     | ケント伯の台詞   | 「王は正気を失っている」  |  |
|                  | グロスター伯の<br>指示                                     | グロスター伯「リアの命が狙われている」、「リアを連れて一緒にドーヴァー<br>へ行け」[ドーヴァーの地名が出てくる]  |  |

『リア王の悲劇』の新構想 (1) —フランス王国軍は来ているか—

|                |                     |  |  |
|----------------|---------------------|--|--|
| Sc.14<br>3.7   | コーンウォール公爵の台詞        | ゴネリルにエドモンドから渡された手紙を託し、オールバニ公爵のもとへいけと指示する。<br>「フランス軍(‘The army of France’)が上陸した(landed)。」[この情報は上記のとおりQ1, Sc.10, F1, 3.3およびQ1, Sc.12, F1, 3.5のグロスター伯の手紙の内容がエドモンドの密告で公爵に伝わったもので、事実確認できていない] |  |
|                | コーンウォール公爵の台詞        | グロスター伯を“the villain”と呼ぶ(1.3)。  | グロスター伯を“the traitor”と呼ぶ(1.3)。          |
|                | オズワルドの台詞            | 35～6人の騎士たちと数名のグロスター伯の家臣たちがリアを連れてドーヴァーに向かった。それらの者たちは軍備を整えた味方(well-armed friends)がドーヴァーにいたと言いたてている。[後にコーディーリアの軍にはこれらの「味方」も加わっているはずである。]  |  |
|                | グロスター伯の台詞           | Unmerciful lady as you are, I am true.   | Unmerciful lady as you are, I am none. |
|                | コーンウォールの台詞          | コーンウォール公爵はグロスター伯に、「フランスからどんな手紙(what letters from France)を受け取った」、「進軍する謀反人たち(the traitors/ Late footed in the kingdom)とどう結託した」と詰問する。   |  |
|                | グロスター伯が拷問を受けながら話す台詞 | グロスター伯は「確かに手紙は受け取ったが、推測で書かれたもの、敵方からのものではなく、中立の立場の人からの手紙である」と反論。  |  |
| Sc.16<br>4.2   | オズワルドがゴネリルに伝える台詞    | 軍隊が上陸した(landed)ことをオールバニ公爵に伝えたと、ゴネリルに伝える。   |  |
|                | ゴネリルの台詞             | 「フランス王(France)がわが国土に軍旗(his banners)を翻して、あなたの玉座(thy state)を脅かしている。」   |  |
|                | オールバニ公爵の台詞          | 「父親をお前たちが狂気に追いやった」[公爵はリアの狂気を知っている]   | [この台詞がなく、公爵はリアの狂気を知らないことになる]           |
| Sc.17<br>----- | ケント伯の問いかけに答える紳士の台詞  | フランス王が緊急に帰国し、総指揮官はラ・ファー閣下に交替した。<br>オールバニ公、コーンウォール公、両公爵も軍勢を進軍させている。   | [Q1のSc.17全体がF1で削除されている]                |

続いて、コーディーリアが再登場以降についても、Q1とF1の違いを追っておこう。

|              |                           |  |   |
|--------------|---------------------------|--|---|
| Sc.18<br>4.3 | ト書き                       | コーディーリア、医者、その他登場<br>(Enter Queen Cordelia, a Doctor,<br>and others)  | 鼓手、旗手とともに、コーディーリア、<br>紳士、兵士たち登場 (Enter, with<br>drum and colours, CORDELIA,<br>GENTLEMAN and Soldiers.)     |
|              | コーディーリアの<br>台詞            | 父の搜索に百人隊を数個 (The<br>centuries) 送れ。   | 父の搜索に百人隊を1個 (a centu-<br>ry) 送れ。  |
|              | 使者の台詞                     | ブリテン軍 (The British powers) がこちらに進軍している。  |   |
|              | コーディーリアの<br>台詞            | 「わが軍 (our preparation) も戦闘態勢が整っている」<br>great France [フランス王] /<br>My mourning and important tears<br>hath pitied.           | great France [フランス王] /<br>My mourning and importuned tears<br>hath pitied.                                  |
| Sc.20<br>4.5 | 紳士の台詞                     | 「后 [=コーディーリア] は事情がありここ [ドーフアーらしい] にいるが、後の<br>軍隊 (her army) は出動している」  |   |
| Sc.21<br>4.6 | 登場人物                      | Enter Queen Cordelia, and the Earl<br>of Kent, disguised.<br>Enter the Doctor, and First Gentle-<br>man                    | Enter CORDELIA, Kent [dis-<br>guised], and Gentleman<br>[Doctorは登場しない]                                      |
| Sc.22<br>5.1 | ト書き                       | Enter Edmund, Regan, and their<br>powers   | Enter with drum and colours, ED-<br>MOND, REGAN, Officers and Sol-<br>diers                                 |
|              | ト書き                       | Enter the Duke of Albany and<br>Gonoril with troops  | Enter with drum and colours, AL-<br>BANY, GONERILL, Soldiers  |
|              | オールバニ公爵<br>の台詞            | 「王が末娘と合流した。わが国の中で王政に不満の声をあげた者たちも<br>従っている」[公爵はリアを「王」と認めている]  |   |
|              | オールバニ公爵<br>の台詞            | 「今回の件は、フランス王の侵略で<br>ある限り、自分 (=オールバニ公爵)<br>に関わる」<br>「王は大胆であり、支援者と行動を<br>ともにしている。大義名分があれば<br>反乱は起きるもの」[リアの側に大義<br>名分があると認める] |   |
| Sc.23<br>5.2 | ト書き[黙劇風<br>に舞台で演じら<br>れる] | 突撃ラップ。フランス軍の軍勢 (the<br>powers of France) が舞台上に登場、<br>コーディーリアは父の手を引いてい<br>る。  | 舞台奥で突撃ラップ。鼓手と旗手<br>[colours] を先頭に、リア、コーディー<br>リア、兵士達 (Soldiers) が舞台に登<br>場し、やがて退場。[兵士たちはフラン<br>ス軍と特定されていない] |
| Sc.24<br>5.3 | ト書き                       | エドモンド、捕虜になったリアとコー<br>ディーリア、隊長、兵士たち、登場。   | 鼓手と旗手 [colours] を伴って、勝利<br>したエドモンド、捕虜となったリアと<br>コーディーリア、兵士たち、隊長、登<br>場。                                     |
|              | 幕引きの台詞の<br>話し手            | 公爵 (=オールバニ)  | エドガー  |

## 注

- \* 本文中の日本語訳については、小田島雄志訳『リア王』（白水Uブックス、1983年）、大場建治訳『リア王』（研究社、2005年）を使わせていただいた場合があり、そのつと注記した。
- 1) 上の二人の娘は結婚しており、父親によればまだ子どもを産むかもしれない年齢であるらしい。リアが長女ゴネリルに向かって呪いをかける台詞がある（「この女の子宮に不妊の呪いを〜」F.1.4, 230~244, Q, 4, 265~280）。末の娘は物語が始まるとすぐフランス王との結婚が決まる。姉妹たちは今日で言うならば思春期から壮年期まで幅広い年齢幅に属する可能性がある。
  - 2) “The War in ‘King Lear’” (K. Muir (ed.) *Shakespeare Survey*, 33, 1980, p.31) において Gary Taylor が指摘するとおり、コーディーリアの軍勢がフランスの軍隊であれば、劇中の戦闘はフランスの「侵略」戦争となり、ブリテン国の側への愛国心 (patriotism) に訴えて、コーディーリアの戦死が説明可能とも言えるだろう。「侵略」戦争は党派心に火をつける、というわけである。しかしその議論になるやいなや、コーディーリアの侵略は「正しい」という主張が生まれる。例えば、John F. Danby, “Cordelia’s invasion of Britain is simply right.” (*Shakespeare’s Doctrine of Nature* (Faber, 1948) , p.133) という具合に。これはその論者がコーディーリアの側についた、と意味するに過ぎない。「正しい侵略戦争」などありえない。それを言い出してしまうと戦争は克服できない。侵略戦争の遂行者たちが自分は正しくないと主張して戦争をしたことがあるだろうか。
  - 3) シェイクスピア自身による「改訂」論の例は次のとおり：  
Steven Urkowitz, “The purpose of this study is to demonstrate that the major variants in *King Lear* are the result of careful revision performed by a theater artist, most probably Shakespeare himself.” *Shakespeare’s Revision of King Lear*, (Princeton University Press, 1980) , p.16.  
Gary Taylor, “My conclusions, then, …are that *King Lear* was originally composed in late 1605 to early 1606, and was then revised, by Shakespeare himself, probably in 1609 – 10. That the play was revised, and that Shakespeare was responsible for the revision, seem to me incontestable;…” “*King Lear* The Date and Authorship of the Folio Version,” in *The Division of the Kingdoms*, (Oxford University Press, 1983) p.429.  
なお大田一昭『『リア王』と2つのテキスト』は、「両版が別個の構想によって書かれた異なる劇であるという見方に傾く」（九州大学大学院言語文化研究院言語研究会『言語科学』（第44号、2009年）、p.46）と述べる一方で、クォート版からフォリオ版への改訂説に疑問を呈して、「シェイクスピアのオリジナルの原稿はF〔フォリオ版〕のテキストあるいはそれに近いものであって、Q〔クォート版〕特有の行が実はのちの加筆であった可能性はないのか」としている（同、p.61）。
  - 4) Geoffrey Bullough, Introduction to Volume VII Major Tragedies: Hamlet, Othello, King Lear, Macbeth, (*Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. 1978) .  
グリム童話集にも似た要素をそなえた物語が収められており、シェイクスピアの『リア王』との比較で知られている。「泉のほとりのがちょう番の娘」、野村法訳『完

訳グリム童話集』（ちくま書房、2006年）第7巻所収。ここでも末娘が「お父さまを塩のように愛しています」と答えて親子間でトラブルが発生する。

- 5) Gwyn Jones, Introduction to Geoffrey of Monmouth, *History of the Kings of Britain*, (Everyman's Library, 1963), p.vi. ラテン語のタイトルは、Everyman's Libraryでは *Historia Regum Britanniae*、上記 Bullough の引用する 1718 年版では *Historica Anglicana* とある。
- 6) 上掲 Bullough は、モンマスの歴史書を 'probable source' に分類している (p.311)。さらに Bullough は、「シェイクスピアはラテン語原典を読んだか、または近い時代の作家たちによるジェフリーの引用文から詳細を読んだことは十分ありうるであろう」(p.273) と述べる。
- 7) その他、シェイクスピアが材源としたことが確実であるが、しかし具体的な文言等の影響関係はないようだとされる (Bullough, *op.cit.*p.274) のが、ラファエル・ホリンシェッド『ホリンシェッドの年代記』(Raphael Holinshed, *THE SECOND BOOKE OF THE HISTORIE OF ENGLAND* (1587 edn.)) である。細部で異なる部分もあるが、骨格となる物語は上記モンマスと同じである。その他、シェイクスピアが参照したと考えられているものとしては、エドマンド・スペンサーの『妖精の女王』第2巻第10歌、*Mirror for Magistrate* 中のリア王物語などがある。
- 8) 上掲 Bullough, p.278.
- 9) これ以後の考察の準備として、「合成版 (conflated text, composite text)」に関して一言。今日舞台用に用いられたり、読者の目に触れたりするテキストは大多数がこれだと思われる。ただし、最近では注釈書や翻訳書で、*The Tragedy of King Lear* 『リア王の悲劇』を底本とする試みが行われている。2005年の大場建治対訳・注解『リア王』、2020年の河合祥一朗訳『新訳 リア王の悲劇』である。合成版の編集者たちは、Q1とF1テキストを合成して編纂したのである。これから述べるとおり、Q1とF1では作品の統一という観点からテキスト内容に相互に矛盾する場合がある。それを一つの作品として編纂すると、全体として理解困難な作品になってしまうであろう。Michael Warren は、いわゆる合成テキストは破綻して (invalid) いる、として次のように述べる：“Conflated texts such as are commonly printed are invalid, and should not be used either for production or for interpretation.” in David Bevington and Jay L. Halio (eds.), *Shakespeare, Pattern of Excelling Nature* (Associated University Press, 1978), p.105. 合成テキストの『リア王』をもとにして悲劇を論じるのは、特定の編者の編集結果としての『リア王』と向き合うことであり、シェイクスピアの作品を論じることにはならないと思われる。
- 10) 『リア王』印刷本に関する事実を確認してみよう。大場建治編『リア王』(研究社、2005年、p.xix)によれば、「*King Lear* は1623年の第1二つ折り本 (First Folio [F1と略記]) に収録される前、シェイクスピア生前の1608年にすでに四つ折本 (Quarto) で出版されている (Q1と略記)」。さらに大場による説明をまとめれば、F1のテキストは、①「先行のQ1のテキストを原本として印刷された」という説と、②「シェイクスピアによる別の台本原稿をもとに植字の作業工程でQ1を参照して印刷された」という説と、可能性として二つの方向性が考えられている。さらに、これらQ1とF1二つのテキストのそれぞれから派生したテキストが存在する。結果として、

『リア王』におけるテキストの違いは複雑多岐にわたり、「*King Lear*のテキストをめぐって考察すべき書誌学的問題はあたかも底無し泥沼のごとくである」(大場、同書、p. xxv)と言われるほどである。そのうち、Q1とF1の違いを数字で表わすと：Q1にあってF1にない台詞が約300行、逆にF1にあってQ1にない台詞が約100行、そのほか意味に係わる語句等の相違 (substantive differences) が約1,500箇所 (大場、同書、p. xxi) が確認されているという。

- 11) Gary Taylor は、「われわれはQ1とF1の合成テキスト [=conflated text または composite text] に慣れ切っているので、それぞれ別個に上演するとそれぞれが全体としてどのようなものになるか、推測を試みることは難しい」と述べている。G. Taylor, “The War in ‘King Lear’” (K. Muir (ed.) *Shakespeare Survey*, 33, 1980) p.34.
- 12) ただし、Q1でもF1でも場所の指定はなく、ゴネリルが登場するからオールバニ公爵の住まいとして、後のテキスト編集者によって指定されたものである。1972年のThe Arden Shakespeare シリーズ版の*King Lear*で、第1幕第3場のト書きに“A Room in the Duke of Albany’s Palace”とあるのは、18世紀の編集者Capellが加えたト書きを用いたものである。『リア王』におけるこのような傾向をStanley Wells は“delocalization”と名づける。Wells, Introduction to *The History of King Lear*, p.33. Geoffrey Bullough も、「場所と時間の詳細についてはあまりこだわらなかつた」と記している。Bullough, *op.cit.* p.283.
- 13) ちなみに、F.1.1.127, Q1.Sc.124でリアは百人の騎士 (a hundred knights) を随行させると指定しており、そこでは’squires’には言及していない。その’squires’はAlexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon*によると「knightの下の地位の紳士 (gentleman)」で、ここでは「従騎士」としておく。大場 (p.73第1幕IV場 1.213の注)では、「squire (=esquire) は本来 knight の従者」としており、本文では「郎党」と訳している。百人全員がknightsであるか、knightsとsquiresの混成であるか、その違いは何か示唆するかどうかは明確でないが、すぐ後でゴネリルは「騎士百人」(1.276)と言いつつ直す。Geoffrey Bulloughはシェイクスピアがこの’squires’という語は材源の一つとされる*The Mirror for Magistrate*から採ったのだろう、と指摘する (上掲Bullough, p.275)。*The Mirror for Magistrate*の第125行では、“threescore knights & squires”と記述される (Bullough, p.326)。

リアの従者の数については、シェイクスピアのリア王物語の材源の可能性があるとされる資料Geoffrey of Monmouthの*The History of the Kings of Britain*の記述では、リアは上の娘と滞在する間に当初の40名の騎士 (knights) が20名に減らされ、次女の所へ移る。次女がそれをさらに5人に減らしたので、リアは再び長女の所へ行くが、今度はそこで1人に減らされる。それでもしばらく長女のもとで暮らしながら、海を渡って末の娘の所へ行くことを考え始めるのである。

直接の材源となったとされる芝居*The True Chronicle Historie of King Leir*では、騎士や従者ではなく、リアに与えられる“pension” (年金) や “allowance” (手当て) が減らされる。

- 14) もちろん、今日と違って、移動手段は人間の歩行、馬や馬車、船に限られ、それらは同時に通信手段であるから、相互のやり取りには相当の日数が経過すると想定されるわけである。注12の“delocalization”の場合と同じように、フランスとブ

- リテンの距離など、場所間の距離の感覚もこの芝居の中では感じさせない。
- 15) F1テキストについてDr. Johnsonがこの場面の紳士は「どういう理由で行くのか、どこへ行くのか、わからない」と指摘している：“for in the folio, the messenger is sent, he knows not why, he knows not whither.” (Johnson’s note to III. i .19) (Dr. Johnson, ‘Notes to *King Lear*,’ Folger Shakespeare のテキストによる。) Gary Taylor は、このジョンソン博士のコメントを引用した上で、F1においてこの紳士はケントの言うとおりコーディネリアと「おそらくはまもなく、おそらく近くで、おそらく第2幕第2場の手紙にあるとおりに」会うことになるとして、コーディネリアの再登場 (F1の第4幕第3場冒頭の書き) に際して一緒に登場する紳士であるとしている (Taylor, “War,” p.32)。
- ちなみにこの紳士の台詞“I will talk further with you.”について、Urkowitzが指摘しているとおりに、その台詞は紳士によるケントの申し出の丁寧な言い方の拒否 (rejection) で日本語訳としては、「そういう話はまたの機会に伺わせてください。」ということであろう。紳士は言外に「私はもうこれで失礼したい」と匂わせて、ケントの話にきりをつけて立ち去ろうとしている。ケントはその様子を見て、「ちょっと待ってください。行かないでください (No, do not.)」と引き止めるのである。Urkowitz, *op.cit.*, pp.68~70.
- 16) Steven Urkowitz もF1でフランス王国軍がブリテンに侵攻しているとみなし、グロスター伯の台詞ではフランス王国軍であることが明確でなかったけれども、コーンウォル公爵の台詞まで遅延されて明らかになっていると述べる。Urkowitz, *op.cit.*, p.73.
- 17) F1テキストを編集したThe New Cambridge Shakespeareの編者 (Jay L. Halio) は、この“footed”が“landed”の意味だと注を付している (p.180)。C.T.Onions, *A Shakespeare Glossary* も、ここの用例を出して“footed”を“to be landed”と定義している。しかしこれらの読みは、コーディネリアが率いてフランス王国軍が侵攻していることを前提とした読みであると理解しなければならない。Q1の“landed”からF1の“footed”にわざわざ変更されたことが重要で、そこに意図が読み取れるからである。
- 18) Urkowitzもまた、Qの‘landed’がFにおいて‘footed’に修正されたことを指摘している。上掲書、p.73.
- 19) ‘closet’は「戸棚」または「部屋」。The Oxford Shakespeareの編者Stanley Wellsは‘private room, or cabinet’と、The New Cambridge Shakespeareの編者Jay L. Halioは‘private room’と注を付している。Alexander Schmidt (*Shakespeare Lexicon*)はこの箇所を取り上げて、‘closet’を‘a repository in the side of a room’と定義している。
- 20) Stanley WellsはQ1テキストを編集したThe Oxford Shakespeare版テキストの注で、「おそらくエドモンドは父親が部屋に錠をした手紙を盗んだのであろう」(p.197)と述べているが、その想定は何も根拠がない。ただし、捏造論も根拠はないが、エドモンドはすでに別の手紙を捏造して兄エドガーの手紙だと父親に嘘をついている。
- 21) Q1テキストのコーンウォル公爵はグロスター伯を“Seek out the villain Gloucester” (Sc.14.3, “villain”は「悪党」と呼ぶが、F1ではその語が“Seek out the traitor Gloucester” (3.7.3, “traitor”は「謀反人」と修正されており、「謀反人」に仕立てて

- いる。しかしその後この場面でコーンウォール公爵がグロスター伯を呼ぶ言葉は、Q1、F1とも共通して“traitor”である。Q1の最初の“villain”が“traitor”に修正されたことになる。
- 22) グロスター伯がコーンウォール公爵を‘The noble Duke my master, /My worthy arch and patron’と呼ぶ (2.1.57~8)。さらにグロスター伯はリアも“the King, my old master” (3.3.18)と呼んでいる。
- 23) Gary Taylor, “Nothing in the Quarto text suggests that Cordelia’s *others* are an army;…” “The war in *King Lear*,” p.30.
- 24) Gary Taylor, *op. cit.* p.30. “in the Folio she enters at the head of an army.” 大場建治『リア王』には「ホリンシェットのコーディーリア像とリア王像」としてイラストが掲載される (p.223)。軍を率いるにふさわしい逞しい姿のコーディーリア像である。ジェフリー・オヴ・モンマスが『ブリテン王列伝』(1138~39年頃)執筆に取り掛かっていた頃のヨーロッパの12世紀には、R. パートレット『ヨーロッパの形成』によれば、女性が軍を率いることは他の時代ほど奇異なことではなかった、という記述がある。1128年にスペインでタラゴナの総督となったロバート・バーデットの妻で「サマセットシャーの領主ウィリアム・カブラの娘シビルは夫の不在の際に、鎧を身に付けて職杖を持ちタラゴナの城壁を巡回したとされる。西洋の男勝りの女性がカタロニアの都市を巡回する様は多分いかなる時代でも普通の光景ではなかっただろうが、12世紀においては他の時代よりはさほど異様ではなかった」。Robert Bartlett, *The Making of Europe* (Penguin Books, 1994) , p.30.
- 25) Gary Taylor, *op. cit.* p.30 “the Folio arrangement also has the merit of establishing at once who leads the army which landed at Dover,…”
- 26) Gary Taylor, *op. cit.* p.30.
- 27) Gary Taylor, *op. cit.* p.30. “evidently Elizabethan theatres could produce recognizably foreign armies, when asked to do so.”
- 28) Gary Taylor, *op. cit.* p.31. “the Folio instead encourages an audience to forget it, systematically removing verbal and visual reminders of the French presence, so that Cordelia seems to lead not an invasion but a rebellion,…”
- なおThe Arden Shakespeareの編者であるR.A.Foakesは、Fのト書きにあるこの“colours” (旗手)がフランスの旗を掲げることを求めており、Fテキストにおいてもブリテンにフランス軍が来ていることが分かることと述べる (Introduction, p.141)。R.A.Foakes (ed.) *King Lear*, The Arden Shakespeare edition, 1997. 1997年に出版されたこの版もQとFのいわゆる「合成版 (composite text)」である。
- 29) シャピロは作者不詳の『レア王』からシェイクスピアの『リア王』への「改訂」について述べた所で、「シェイクスピアは、観客が古い芝居[『レア王』のこと]の大筋を——王国が分割され、末の王女が追放され、内乱そしてフランスの侵攻があるといった筋を——知っていることを前提」としていたと断言する。ジェイムズ・シャピロ、『『リア王』の時代』(白水社、2018年)、p.95。
- 30) Steven Urkowitz, *op. cit.* p.73.
- 31) R.A. Foakes, *op. cit.* p.141.